
バルドスカイDivelF

藤原ヒカリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バルドスカイDiveTIF

【NZコード】

N0757P

【作者名】

藤原ヒカリ

【あらすじ】

もし灰色のクリスマスが起こらば、六条クリスも問題を起こさなかつたら、のIF。オリキヤラメイン。

穂伽寮^{ほときょうしゅう}での朝は、すくなく平和だ。

寮監はいるものの、生徒と一緒にになって夜更かししたり、とある場所にハツキングしたりと、ある意味やばいところかもしれない。けど、今日もじたばたしても平和な一日だらつ。

夜更かしだってハツキングだって、ここでは日常茶判事だし。

そう思つてベッドから這い出る。
特に飾り気のない自分の部屋をぼけっと眺めていると、次第に意識がはつきりしてくる。

嗅覚も動き出して、朝食のよい匂いがする。

さてと、今日も一日学校だし、と彼女はベッドを立つて制服に手を掛ける。

何気に可愛ないと評判の星修学園の制服に袖を通し、扉のロックを外し、出る。

茶色い手すりが白い壁紙とマッチしていて、どこか高級感あふれる廊下を眺め、木目の入った扉 もちろん、合成板だが の鍵を掛ける。

「あ、おはよー、冴
「うん、おはよー、華奈恵^{かなえ}」

ふあ、とあぐびしてウイーンクしてみせるのは、遠坂華奈恵という同学生年の女子生徒だった。

情報処理科で、成績は中間あたり、顔は広くてモテる友達だ。

「何、ずいぶんと眠そうね、華奈恵？」
「ん・・・まあ、競技場^{アリーナ}に強いのが居てさ、つい観戦してた」「ふーん、そんなに面白い？私に言わせれば、ただの喧嘩にしか見

えないけど」

私は鼻をひくひくと動かしながら華奈恵の話に耳を傾ける。
その強いやつとは、”カゲロウ”といつカスタム機で、軽量機ながらも重ガトリング砲を使うらしい。

まあ、私もそうなんだけど。

で、そいつが強かつたらしい。名簿を見たら、同じ星修の学園生だったとのこと。

ふうん、と私は聞き流していると、ひとつ大きな扉の前で華奈恵が立ち止まつた。

ここが食堂。本田の当番は後輩の片貝かたかい 津歌沙つかさで、匂いから察するにオニオンスープが出るのだろ？。

「うわ・・・いい匂い」

華奈恵がうれしそうに呟いた。

彼女はいわゆる”食専”で、料理はまるきりだめなのだ。

私は昔寮で一人暮らしをした経験があるので、作れないというわけではない。

私は黄金色のドアノブに手をかけてまわし、扉を開けた。

やはりというか、美しい寮だな、ここは。

木目に入ったテーブルに掛けられた白いテーブルクロスには染みひとつない。

そして、同じ木目の人った椅子が、その魅力を引き立てる。

テーブルに載った花瓶にはバラの花が飾ってあり、火はついていなもの、キャンドルもおいてある。

開け放たれた窓から吹き込んでくるさわやかな風に踊らされる白いレースのカーテンも、陽光を受けて美しく透けて輝いた。
まるで、金持ちの屋敷みたいだ。

調度類から食器類にいたるまでれいにしているのは、この寮に住

む”給仕科”と呼ばれる学科の生徒4人だ。

「お早う御座います、神崎冴様、遠坂華奈恵様。朝食までもう少し時間がかかります故、もう少しお待ちください」

私たちの前にメイド服姿の少女がちょこんと顔を出し、同世代にもかかわらず丁寧な口調で挨拶し、ぴたり45度曲げてお辞儀をしてきた。

彼女が給仕科の一人、鷺頭わじす 理香子である。

腰まで届く長い黒髪を丁寧に三つ編にして、右肩から垂らしている。ちなみにすごく美人で、モテる人物の一人で、さながらシンデレラといつといひか。

「わかった、何か手伝うことある?」

「いえ、特にはありません。朝刊や今日発売の雑誌データを入手して寮のサイトに掲示してありますので、ご活用ください。また、何かあつたらお呼び申し上げてください」

華奈恵の言葉を理香子は丁寧に断り、一礼して私たちの前を去る。入れ替わりに、同じ給仕科の藏前くらまえ 希恵が、真っ白な皿を抱えてきた。

柔らかそうな栗色の髪が風に踊る。

彼女は机の隅に皿を置くと、ひとつひとつ手際よく席の前に並べていく。

先ほどの理香子と違い、挨拶はしてこなかつた。

まあ、彼女は人見知りで最近ようやく少しお話できるようになったって感じだし、と冴は思った。

皿を配り終わると彼女は、そそくわとキッチンへ戻つていく。

私は自分の席に座ると、黙つてウインドウといひ名の虚像を視界に呼び出した。

メールボックスを簡単にチェックし、メイドたちが入手してきた雑誌データを読み漁る。

時計を見ると、まだ登校まで時間はたっぷりある。

「おはよう、みんな」

そこで、扉のきしむ音がしたかとおもつと、野太い声がした。
振り返ると、この寮一番の金持ち、緋奥院 沙耶と双子の妹の夜琉の一人が居た。

彼女たちは黙つて自分の席に移動するべく歩き出す。
それがコンバスのようで、いつもながらに微笑む冴。2人は席に着くと、さっそく何かのデータを読み始めたらしく、空中の一転を見つめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0757p/>

バルドスカイDive!F

2010年11月23日01時18分発行